

コラム

研究者ゴルファーはなぜ少ないか

藤 岡 典 夫

長年行政官を勤めて総研に移ってきたとき、両者の風土、慣習、その他多くの相違に気付いたが、ゴルフ人口が少ないこともそのうちの一つである。今の約50名の研究者中、筆者を含め5名しかいない。しかもそのうち4名は行政官出身である。本省では、40名くらいの課で、少ないところでも10名位はいたように思う。

なぜ少ないのだろう。原因の一つとして、農業経済学を志す者にとってゴルフはふさわしくないとの考え方が残っているんじゃないかという説を人から聞いたことがあるが、今日のゴルフ大衆化時代にそういう考え方をする人は少なからう。

運動よりも勉強の方が好きな人が多いのかもしれない。休日も出勤して研究に没頭している人は少なくない。しかし、テニスや卓球は盛んなようだ。

では、ゴルフ特有の性質が研究者の性格と相容れないのかというと、そうでもなさそうである。反射神経が重要で、相手の裏をかいたりしてひたすら相手を倒す戦いであるテニスなどと違い、ゴルフは冷静な判断力が重要で、専ら自分との闘いであるという性質を有し、どちらかといえば行政官の仕事よりも研究活動に似通っている。また、壁にぶつかったとき、うまくいかないときに、発想・視点を全く変えてやってみると成功することがあるというのもよく似ている。研究の世界では、局面を打開するこの種の偶然のひらめき・発見をする能力のことを「セレンディピティー (Serendipity)」と言うらしいが、ゴルフの世界の「開眼」という言葉がこれに相当するといえるか？ ともあれ、筆者の考えでは、ゴルフは研究と共通するところが多く、むしろ研究者に合ったスポーツなのである。

とすると、原因は、研究者にとってゴルフをする動機に乏しいということであろう。ゴルフの動機には、もちろんそれ自体おもしろいということのほか、健康維持やストレス解消に良いからという理由と、周囲の人、特に職場の仲間とのつきあ

いに由来するものがある。行政官でゴルフをする人のうち、本当にゴルフというスポーツが好きな人もいるが、付き合いを目的にしている側面が強い人が相当割合いると思われる。付き合いと言っても、嫌々だとか、仕方なくやっているのではない。職場仲間と一緒にいること、一緒に騒ぐこと、同じ行動をすることに安心感を持つのであり、その手段として、ゴルフを選んでいるのである。翻って、我が研究所の研究員についてみると、この種のいわば「群れていたい」動機とは無縁な人が多いように見受けられ、必然的にゴルフの動機も乏しいということであろう。

我が国の社会では、一般的に周りとは調和して仲良くつきあっていくことが重要であり、日本人はとくに群れたがると言われる。ところが、最近になって「群れない人」が逆に評価されてきているらしい。イチロー、新庄、野茂、田中康夫、小泉首相等々。そういう意味では、ゴルフ人口が少ないことは、あながち悪いことではないかもしれない(?)。もとより、このゴルフ人口の差だけをもって何か結論めいたことが言えるわけではないが、いずれにせよ、研究者と行政官との違いの一面が表れていると言えるのではなからうか。

ただ、ゴルフも元はと言えば、職場仲間とワイワイ騒ぎながらプレーするものではないのである。そういうゴルフをするのは日本人だけだ。欧米では、一人で、あるいは夫婦で来て、文字通りのカントリークラブでゴルフそのものを楽しんで帰るのが主流らしい。こういう本来のゴルフをする研究者はもっと多くいてもいいと思う。

さて、ゴルフ人口が少ないのは我が研究所に特有の現象なのかどうか、という点の検証は未だ残されている。他省庁の政策研究所や自然科学系の研究機関ではどうなのだろう。自然科学系の研究はグループですることが多いから、その分、付き合いの要素が入り、ゴルフ人口も我が研究所よりは少し多いだろうと推測するが、実態は？